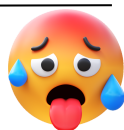




沸騰化の日々、いかがお過ごしでしょうか



猛暑と豪雨災害多発の今、“命と清流”を考えてみた

その1 気候変動がもたらす球磨川流域の豪雨災害の特徴と川辺川ダム問題

2020年には球磨川の中流域の山地に滝のような恐ろしい局所集中豪雨が降り、多くの人命を奪う災害を引き起こしました。でも、この時、川辺川流域にはこのような雨が降っていません。人吉市に大氾濫を起こすような洪水も発生していません。市街地を襲った大洪水は第四桥梁が流木でダム化し、その後崩壊したためです。中流域山地の豪雨の降り方は偶然に起きたものではなく、球磨川流域の地形を反映して起きたものです。川辺川にどんなに大きなダムをつくっても、気候変動がもたらす球磨川流域の豪雨災害を防ぐことはできません。命は守れません。

その2 川辺川流域の地形・地質の特徴と川辺川ダム問題

それでもダム建設しか考えない県と国は、2020年に発生した豪雨災害を利用して日本一大きな治水ダムを計画しました。大きなダムが建設できるのは溪流の女王ヤマメが棲む素晴らしい渓谷のためです。国と県は「命と清流を守る」流水型ダムであると宣伝しています。でも、前項で述べたように命は守れません。では、清流は守れるのでしょうか。答えは渓谷の川辺川流域の地形・地質が教えてくれています。

川辺川流域の地質は断層や褶曲が多く、川辺川沿いの山地の岩は破碎されています。川辺川の渓谷は流域の地質のもろさと共に存在しているのです。ここに巨大ダムを持ちこむとどんなことが起きるのでしょうか。流水型ダムは治水ダムのことです。治水ダムは大洪水が発生する度にダムに水を貯めてすぐに放流してしまいます。水圧の大きな変化のため、山地は崩れ、多量の土石が渓谷を埋め立てます。川底に堆積した土石は雨が降る度に濁水をつくり、濁水は長期間流れ続けます。ダムより下流は清流の女王アユが暮らしている川です。アユが住めない川辺川に変わってしまいます。清流は守れません。

(H.K)



瀬目トシネル直下旧道



瀬目トンネル直下旧道



斜面崩壊のあと

7月21日 川の学習会～川辺川流域の地質を学ぶ～



講師の村本先生



四浦隧道トンネル内



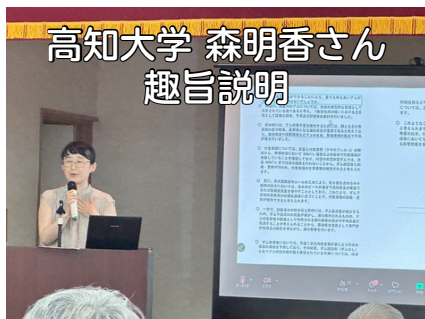
四浦隧道トンネル

- 参加者からの感想
- ・1番見たかった高原の扇状地。あんなに綺麗に見れる場所に驚いた (Kさん)
 - ・川は真ん中しか流れるイメージしかなかったが、扇状地の隅っこの方に流れていくのが分かった (Tさん)
 - ・文献を読むだけではイメージ出来ないことが現地に行って説明を聞いたことでより頭に入った (Iさん)
 - ・瀬目トンネルの下に新しいひび割れが出来ていた。とても危ないと思った(Kさん)

6月29日研究集会報告 専門家と住民による川辺川ダムの検証 場所：
ダムで“命”と清流を本当に守れるのか 新町町内会館 午後1時より

○川辺川・球磨川 透視度市民調査より 木本千景さん

国交省や県が守るという“清流”は一体どんなものなのでしょう？国交省は、環境アセスメントやホームページ内のFAQで、環境基準値SS25mg/lという数字を出しています。県は「清流に対する思いは一人一人異なりひとつの言葉や指標で表せない。県の清流の基準はない。」と答えました。SS25mg/lを私たちでも測れる透視度に換算すると、約25cmでした。25cmの深さしか見えない川は私たち住民が思っていた清流ではありません。国交省が勝手に決めた清流の基準です。では、私たちにとっての清流は透視度でいうとどうしょう？手渡す会で2024年に行った調査では、住民が清流だと思うのは透視度180cm以上でした。行政が清流を守ると言っているから安心している住民は多数居ます。多くの方に住民と行政の清流について認識の乖離がある事を広めなくてはなりません。更に清流とは、水の透明さだけでなく周囲の自然環境・生物の量や多様性・暮らしとの関わりやその他様々な要因が重なり、人々に愛されている川が清流であると考えます。



住民の清流 188cm



国の清流 26cm

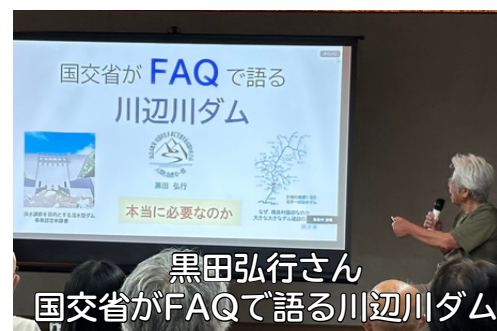
○豊かな自然を守る立場からお話頂いた
一柳英隆さんより

流水型ダムは貯水型ダムより環境影響が小さいとされますが、特有の影響があります。試験湛水や洪水貯留で石や砂が堆積し、洪水期末の水位低下時に砂や細かな土が動き濁りが生じます。この濁りは自然出水や貯水型ダムより強く、堆積砂は後の出水でも動き、降雨のたびに濁水を発生させます。湛水域の斜面では水没による樹木枯死、土壌流失、岩盤崩壊が起こり、森林が回復しない恐れがあります。森林と川は落ち葉や動物の移動で結び付いており、ダムはその連関を損なう可能性があります。

国土交通省の環境影響レポートは「濁りはあるが魚は残るのでは」「濁りの環境基準を超える日数は変わらず影響はないのでは」「植物は枯れるが林に戻るのでは」と楽観的です。影響の経路や評価基準を検証し、川辺川で何が起こるかを議論することが必要です。

○ポーランドよりZOOM参加
Beataさんより感想

川辺川ダム問題を徹底的に検討した専門家の興味深い発表を聞いて、前世紀の防災対策であるダムでは、温暖化によって発生する豪雨やそれに伴う水害から住民を守ることはできず、むしろ地域の豊かな自然を破壊してしまうことがわかりました。近年はヨーロッパでも、温暖化によって激化する豪雨災害によって多くの命が奪われ、人々の日常生活が一変しています。このような災害から命を守るためには、コンクリートの塊ではなく、より自然に即した対策を考えるべきだという学者たちの声が上がっています。



事業認定の公聴会傍聴にご参加を!!

日時：9月5日（金）13：30～20：00 9月6日（土）11：15～18：00

場所：人吉カルチャーパレス小ホール

美しい川とふる里を守ろう！



漁協の動向と漁民さんの声

2025年6月末、球磨川漁協執行部は組合員向けの漁業補償に関する説明会で、国から提示された流水型ダム建設に伴う漁業補償額が、約8億1千万円だと明らかにしました。補償の内訳は、ダムサイト700m区間で継続的に漁業ができなくなることに1775万円、試験湛水による漁場の制限に1863万円、堆砂の影響に6375万円、工事期間中の濁りによる影響に7億1181万円。流域13か所で組合員向け説明会を開いた後、9月までに臨時総会を開催し、国との補償契約締結の可否を問う方針です。前回の漁業補償額16億5千万円に比べ半減した形ですが、堀川組合長はメディアの取材に「組合員が減り、漁獲高が減少した」「良心的な積算」等と語っています。補償の受け入れには、議決権を持つ正会員の過半数が出席した総会で、3分の2以上の賛成が必要です。ただ、先行きは明るくないのが実状のようです。他方で、手続きに関する疑問の声も聞こえます。漁業補償額提示に先立ち、5月中旬に国は、仮排水路トンネルで球磨川産アユ700尾以上の遡上実験を行ない、150～620以上の遡上個体を目視で確認した、と公表しました。現場の漁師からは、様々な条件での検証をしてはいないため、必ずしも遡上するとは言えない、と指摘する声が上がっています。(S・M)

五木村地区別説明会で明らかになった事

○Tさん寄稿

国道445瀬目トンネルは、平成8年に完成し、以降地域の最重要生活道路です。ところが平成27年に突如、このままでは危険と国交省が1年半の工事でトンネルを迂回させるように掘り直しました。後に知ったのですが、この改良工事は国交省が自ら判断したものではなく、手渡す会が指摘したことがきっかけだったそうです。その後は、安全性が確保されたものと思っていましたが、令和7年5月、地域住民の地盤に対しての質問に、国交省は「今でも瀬目トンネルは動いている」とし、1ヶ月後に「動いている箇所は、トンネルから少し離れた地点だから危険性はない」と、追加説明をしましたが、誰も離れた地点なら安心とは考えず、逆に心配が増しました。そう言えば、アセスの最終報告があった令和6年11月以降も、藤田から頭地の間10か所以上ボーリングをやっているのを、住民は皆不思議に思っていました、理由がわかりました。親達も言っていました、この付近の地盤は、昔から言われているように、やはり軟弱地盤なのです。それをわずか2・3年で転勤する国交省職員が「安全です」と言っても、誰も信用するはずがないでしょう。

あ と が き

2020年7月4日の豪雨災害から5年の歳月が流れました。

災害直後から国土交通省は熊本県知事に圧力をかけて、川辺川建設を再開するべく画策を始めました。「ダムがあれば浸水は6割防げた」「ダム建設で清流も命も守れる」等、ウソ八百の宣伝をし、洪水の検証もずさんなままに五木村・相良村の首長を丸め込み、建設推進に邁進しています。手渡す会では5年前の洪水被害検証を徹底して行い、ダムでは清流も命も守れない、逆に危険であるという事実を国や県に幾度となく申し入れ、共同検証を要求していますが、返事はありません。ダムの事業認定の今こそ、一人一人の反対の声を大にしてダム建設を中止に追い込みましょう！(M・K)